

第1回 6月11日(3コマ)「ガイダンス、授業の概要説明、単位認定について」

(元理学研究科:圓山 裕)

広島大学の理念「平和を希求する精神」のもと、被爆地広島で戦争と平和について文理融合の観点から思考することを提示する。初回ガイダンスでは、授業の概要と総合評価・単位認定について説明する。

授業の概要として、3つのキーワード：(A)放射線被曝、(B)世界史のなかのヒロシマ、(C)広島の復興と継承、について講義内容(要旨)に沿って概説する。課題と評価では、課題(コメントシート、平和レポート、最終レポート)に関する評価の方法と単位認定について説明する。

本授業では一連の講義を通して、平和な社会の維持とヒロシマを継承することについて、受講生が深く考え、自分事として自らの見識を広げることを目指している。

第2回 6月11日(4コマ)「I. いろいろな放射線の身体的影響：広島原爆被爆、チェルノブイリの原発事故を含めて」(A)

(元原医研、医師:武市宜雄)

広島は世界で初めて人を殺傷する目的で投下された原爆の被災地であり、10万人近くの人々が死亡し、その後の放射線後障害で苦しみ死亡した被爆者も多かった。一方で、放射線はガン治療やX線診断といった医療面や、原子力発電は電力の供給といった良い面もある。このような放射線に関しての良い面と悪い面、外部と内部被曝、線量と臓器感受性、後障害(ガン発生を中心に)、そして風評被害等を説明する。①広島・長崎の原爆被爆者に加えて、広島大学から海外に出かけて甲状腺検診、診療を行ってきた②セメイの核実験と③チョルノービリ原発事故での経験、そして④ビキニ環礁水爆実験、⑤福島原発事故等のできごとから、放射線の人体被害を解説する。

第3回 6月18日(3コマ)「放射線の被曝とその影響研究の意味

—広島からセミパラチンスクまで—」(A) (元原医研:星 正治)

放射線の研究や利用は、約100年前にレントゲンによりX線を発見した事にはじまる。そのX線は人体を透かして骨などの状態を見ることができるといった医療への応用や、その他幅広い分野で役立つことも分ってきた。ただ、それと時を同じくして放射線に被曝すると悪影響がある事も分ってきた。そして、先の大戦で広島・長崎に投下された原爆で多くの人々が被災しただけで無く、その後被爆者は長年にわたって発がんなどの放射線障害に苦しめられていることも分ってきた。

この広島・長崎の被爆による放射線の影響調査は、放射線影響研究所(RERF)(当初は原爆災害調査研究所(ABCC))で行われ現在に至っている。そこでは、被爆者の協力により放射線の被曝と白血病などの発がんなどの影響が調査され、その影響が解明されてきた。このように広島・長崎の原爆投下による大きな被害があったが、そこから放射線の影響が詳しく分ってきたのである。

放射線の影響は被曝線量と発がんなどの影響との関係を統計的に求める事で得られ、放射線のリスクと言われる。そして、放射線の影響調査においては、被曝線量を正確に求めることが重要である。その調査は、1983年より日米の大きな研究プロジェクトにより進められて来て、現在にまで続いている。ここでは、その被曝線量とその研究の経緯を説明する。

それから、旧ソ連のセミパラチンスク核実験場周辺の住民に対する、放射線の被曝線量と影響研究にも応用され、研究が続いているので、その現状についても解説する。

第4回 6月18日(4コマ)「II. いろいろな放射線の身体的影響：甲状腺を中心に」(A)

(武市宜雄)

広島大学では、原爆被爆者甲状腺の検診、診療、外科手術を行ってきたが、気づけばその中100家族近くの被爆二世、三世が含まれていた。チョルノービリとセメイでは、このような経験に基づく甲状腺検診を行ってきたので、これらの海外での経験も加えて、甲状腺癌に関する発生・増殖・悪性度・癌遺伝子の問題と、甲状腺機能異常からの成長、知能の発育、妊娠出産、老化そしてうつ病(メンタル面)の問題も含めて説明する。

チョルノービリでは、現地での検診を通して小児の甲状腺癌の発生に問題を調べてきたが、このウクライナで検診した子供たちがその後成人し、新型コロナに見舞われ疲弊している時に、ロシアのプーチン大統領によるウクライナ侵攻を受け、これが今も続いている。検診・診療を行った村や町が破壊され、美しい首都キーウも攻撃され、そしてチョルノービリ原発事故現場にも戦車が侵入したり、大変な状況にある。これらの経験を

通しての“放射線・甲状腺・平和”の関連について解説する。

第5回 6月25日(3コマ)「現代物理学と原子力 ―科学と技術―」(C) (圓山 裕)

20世紀初頭に確立した量子力学と相対性理論で代表される現代物理学は、約100年を経た今日では、物質と宇宙に関する理解を深化させると共に、半導体や原子力などの技術を通じて人類に多大な恩恵を及ぼしている。しかし、科学(理学)と技術(工学)の進歩には「光と影」の両面がある。その最たる例が原子構造の解明による応用(原子力発電と原子爆弾)である。原爆による広島と長崎での多くの犠牲者と甚大な被害、原発事故による福島住民の放射線被曝と生活基盤の崩壊が想起される。

本講義では、現代物理学の発展過程を原子力とX線の利用を通して概観する。それを踏まえて、原発による電力の安定供給と事故への懸念、核廃絶活動の一方で核抑止力の容認など「二律背反」の現実を考える。ロシアによるウクライナ侵攻と被爆80年の節目を過ぎて、核の脅威を世界に向けて発信すると共に、ヒロシマの記憶と記録を次世代に継承することは喫緊の課題である。科学・技術とデュアルユース(Dual Use:軍民両用)について考察することで、日常生活の安全と安心の確保と共に、平和と戦争について自分事として考えたい。

第6回 6月25日(4コマ)「両次大戦間の国際関係」(B) (元文学研究科:岡本 明)

1918年、第一次世界大戦が終わって、主要諸国は国際平和へと一歩を踏み出した。ヴェルサイユ条約の締結、国際連盟の発足、幾度かの軍縮会議、けれども、ヴェルサイユ条約は敗戦国ドイツに、領土縮小、賠償、高関税の押し付けなど過酷な条件を課していた。またアメリカは国際連盟の提唱国にも拘らず、上院の反対で加盟しなかった。1929年に始まる大恐慌(生産過剰、大量失業者の輩出、貨幣価値の下落)に、アメリカはニューディールで、英仏は植民地・自治植民地を含むブロック経済で切り抜けたが、ドイツは戦後不況を脱しつつあったにも関わらず、ヴァイマル共和国連合を挟む左右両翼の対立、アメリカの財政援助の打ち切りという状況から、1933年ナチス・ヒットラーが政権を独占することになった。イタリアもまたファシスト党政権が1922年という早い時期に出現している。

この日の講義では、欧米の情勢を主に、第二次世界大戦へ傾斜する過程を解説する。

諸君は、「ニュールンベルク裁判」という映画を見たか?

第7回 7月2日(3コマ)「両次大戦間の日本」(B) (岡本 明)

第一次世界大戦で日本は連合国側に加わり、戦後、山東半島や南洋諸島に領土を拡大し、国際連盟の常任理事国(英仏伊とともに)になったが、1915年、対華(袁世凱の中華民国)21箇条で、山東省の権益、南満州の鉄道利権、漢陽ほかの鉄・石炭の権益獲得を吞ませたことや、またロシア革命中のシベリア出兵をその後も続けたため米国の警戒心を生み、国際環境は悪くなった。

1920年代には、一連のワシントン会議(1921~22)で、太平洋四か国条約(日米英仏)、海軍主力艦軍縮協定(日米英)、中国に関する九か国条約などが結ばれた。けれども、海軍軍令部は軍縮協定に不満で、これがロンドン軍縮協定締結の責任者犬養毅(つよし)首相暗殺=五・一五事件(1932)のきっかけとなった。民間人では北一輝、三上卓らの人脈があり、統帥権干犯を叫んだ。

これより先、満州の関東軍は柳条湖事件(1931)に始まる満州事変を起こし、参謀総長石原莞爾(いしわらかんじ)が満州国建設を宣言した(1932)。1936年には陸軍青年将校が、日中戦争不拡大の方針を取る岡田啓介首相、軍事予算の削減に努めた高橋是清蔵相を襲い、二・二六事件を起こした。天皇は鎮圧の意思を示し、首謀者は処刑されたが、以後、閣議での陸軍の発言力は増し、1936年、広田弘毅(こうき)、1937年、林銑十郎内閣、同年近衛文麿内閣の間に、日中戦争は泥沼化し、近衛は交渉の意志すら持たなくなった。対米交渉は続けたが、1941年に暗礁に乗り上げ、米国も厳しい要求を譲らなかった。こうして、同年、東条英機内閣が発足し、ついに対米英宣戦を決意した。

第8回 7月2日(4コマ)「インドネシア日本軍政(1942~45年)をめぐる」(B)

(元文学研究科:植村泰夫)

第2次世界大戦期日本のアジア侵略については、朝鮮半島や中国におけるそれは比較的良好に知られているが、東南アジアについては歴史教科書の記述も少なく、ほとんど知られていない。そこで本講義では、それまでオランダの植民地だった「蘭領東インド」に侵攻して占領し、そこで3年間にわたって展開した日本の「軍

政」を取り上げ、それが如何なるものだったかを考える。

たいへん残念なことに、1945 年のインドネシア独立宣言後に再植民地化を目指して侵攻してきたオランダに対して戦われた独立戦争に一部の残留日本兵士が協力したことなどを以て、日本のインドネシア占領は西欧勢力からのインドネシアの解放であったとする、当時喧伝された大東亜共栄圏構想を彷彿させるような誤った歴史認識がいまだに見られる。こうした認識は「軍政」の実態とは大きくかけ離れており、日本の侵略を美化するものである。この授業では日本とインドネシアの関係の始まりから軍政終焉までの時期を対象に、その実態がどのようなものだったかを史料にもとづいて詳述し、日本の加害責任について考えてみたい。

第 9 回 7 月 9 日(3 コマ) 「中東の平和、戦争と核(1)―ヒロシマからの視点」(B)

(元総合科学研究科:吉村慎太郎)

中東で頻発する紛争は、日本では「民族対立」、「宗教・宗派対立」に根差し、また対欧米絡みでは「文明間対立」を背景とした紛争であるかのように語られる。そうした理解は果たして正しいのだろうか?その是非を知るために、やや歴史を遡る必要がある。

かつてこの地域には、オスマン帝国(1299-1922 年)というイスラーム帝国が長期にわたり存続した。その治世は徳川幕府(1603-1863 年)をはるかに凌ぎ、全盛期の支配領域と言え、現在の中東からヨーロッパ内陸や中央アジアにまで及んだ。それ故、多様な民族・宗教宗派集団を帝国内に抱えたことも知られている。

授業では、その全盛期に顕著な「柔らかな専制」と評される「パックス・オトマニカ」の特性、19 世紀以降に活発化するヨーロッパ列強の軍事的、政治経済的進出と介入・操作、それに伴う帝国の腐敗と統治システムの変容・解体、その過程で勃興したナショナリズム(民族運動)と第一次世界大戦(1914-1918 年)を経て顕在化するに至る「中東諸国家体制」の成立を、視聴覚教材も交えながら講義し、現在まで続く「紛争地帯」としてのこの地域の地政学的特質を探っていくこととしたい。

第 10 回 7 月 9 日(4 コマ) 「中東の平和、戦争と核(2)―ヒロシマからの視点」(B) (吉村慎太郎)

「中東問題」(或いは「中東紛争」)の中核には、いわゆるパレスチナ問題がある。それは「アラブ・イスラエル紛争」と言い換えられるが、日本ではしばしば第一次中東戦争(1947 年)、第二次中東戦争(1956 年)、第三次中東戦争(1967 年)、そして第四次中東戦争(1973 年)というように呼び慣らされている。

授業では、まず戦争の「原因」とこうした呼称が孕む問題について検討したうえで、現在 90 発以上もの核弾頭を保有するイスラエルによる「核兵器開発」に至る経緯、その後の対アラブ紛争過程で核兵器使用にまで踏み込むとしたイスラエルの対応や「曖昧化」政策の特質を検討していく。次に、独裁王政を打倒した 1979 年革命とイラン・イラク戦争を経て、現在国際的に最も深刻な問題とみなされる反米国家イラン(・イスラーム共和国)の「核開発問題」を取り上げていく。特に、イランが「核開発」に拘泥する背景とそこでの国際的な不条理について講義する。さらに、中東紛争で特徴的とされる「テロ」と戦争の密接な関係性を検討したうえで、中東問題との関わりでヒロシマの視点に立った論点を抽出し、結論とする講義を行うこととする。

第 11 回 7 月 16 日(3 コマ) 「広島はなぜ“軍都”になっていったのか?」(C) (元文学研究科:勝部真人)

広島は、しばしば“軍都”であったと言われている。広島城に第五師団司令部が置かれていたこと、戦時には宇品港から戦地に向けて兵士が出征していったことなど、確かに軍都としての機能が大きかったことはまちがいない。ただそれは、意図して軍都形成という事態となったものであろうか。広島市の都市形成は、江戸初期以来の歴史から紐解いていかないと理解できない。そこから見えてくるものとは、何なのか。また明治時代になって、新たな条件が加わってくる。結果として、いわば「偶然の産物」として軍都形成につながっていったのではないかと...という点に焦点を合わせてみたい。

第 12 回 7 月 16 日(4 コマ) 「広島が“軍都”であったから原爆が投下されたのか?」(C) (勝部真人)

市民の間で、時折「広島は“軍都”であったから原爆が投下された」と言われることもあった。しかし、いっぽうで長崎は軍都ではなかった。なぜ広島・長崎に原爆が投下されたのか。

米軍の資料には投下目標候補地として 5 都市が記述されているが、なぜその 5 都市だったのかについては何も記されない。当時の情勢を時系列で追っていくと、米軍の“ある意図”が浮かんでくるように思われる。それを含めて、広島原爆被害・悲劇は必ずしも必然的なことではなく、かなり「偶然の悲劇」であったとも言えるのではないかと。

第13回 7月23日(3コマ)「日本の文学に描かれた原爆」(C) (元教育学研究科:岩崎文人)

広島・長崎に原爆が投下されてから 80 年が経過した。が、世界はいまだ核兵器使用の危機から脱していない。原爆文学が描いた非人間的悲慘をもう一度確認するとともに、背後にある平和への祈りについて考えていきたい。

1. 表現された 8 月 6 日: 8 月 6 日を描いた文学, 手記・記録, 絵画, 映画・写真, 漫画について俯瞰する。
2. 表現への抑圧: GHQ (連合国軍最高司令官総司令部) の占領政策の一端を担った CCD (民間検閲支隊) の検閲と原爆文学について解説する。
3. 戦時下の文学者たち: 原爆文学を発表した文学者の, 文学的出発と戦時下の動向について考察する。
4. それぞれの 8 月 6 日: 原爆文学を代表する原民喜, 峠三吉, 大田洋子, 栗原貞子らが描いた 8 月 6 日について考察する。

第14回 7月23日(4コマ)「原爆と終戦をめぐる日本外交とその国際関係」(B)

(元社会科学部研究科:寺本康俊)

日米戦争の終戦期, 極めて厳しい国際関係の中で, 日本が戦争を終結させることがいかに困難であったかを考察する。かつてローマの歴史家が指摘したように, 「戦争は始めるのは簡単だが, 終えるのは極めて困難である」ことが現実のものになったのである。

米国は, 1942 年, 原爆の開発と製造のためのマンハッタン計画を開始し, 1944 年 9 月, 米英両国首脳によるハイドパーク覚書で原爆投下を日本(日本人)とすることが決められた。

その一方, 日本は, 1945 年 7 月のポツダム宣言に対して, ソ連による日米戦争の仲介に期待をかけ, 同宣言を「黙殺」し, 「戦争の完遂」に邁進することを発表した。

その結果, 米国側にポツダム宣言を拒否したと受け取られ, 広島に原爆が投下され, さらにソ連の対日宣戦布告, 長崎への原爆投下が行われた。

その後, 当時の政府と軍部の指導者層の間で, 宣言の受諾と拒否をめぐる激しい議論が続けられたが, 最終的に天皇の判断で, ついに戦争を終結することができた。

当時, 米国軍部では, 秋以降の原爆投下の可能性, 米ソ両国で日本を分割占領する計画が考えられていた。また, ソ連も, 北海道占領を米国に強く要求していた。

このように, 真珠湾攻撃で開始された日米戦争であったが, その終結は困難を極めた。本講義では, 苦難に満ちたその経緯を考察する。

第15回 7月30日(3コマ)「ヒロシマを語り継ぐ」(C) (圓山 裕)

被爆 80 年と被団協のノーベル平和賞受賞を経て, ヒロシマを次世代に語り継ぐための 3 つの視点を提示する。受講生によるヒロシマの発信を喚起したい。

- (1) Back to the future (未来に向かって後退りする: 古代ギリシャ時代からの格言)

戦争の始まりと終わり方を通して, 戦争の残酷悲慘さを述べると共に原爆の非人道性を訴える。また, 現代科学の発展と原子力利用の拡張に伴って, 核廃絶への平和活動も展開された。これらの歴史を顧みながら未来に向かうべきことを説明する。

- (2) The Personal is political (個人的なことは政治的なこと: 1960 年代ウーマンリブの標語)

個人に降りかかる不条理を, 社会は自己責任だと責めることがある。不条理の原因が政治的である最たる事が戦争だと言える。国は原爆死没者への補償を拒否し続けているが, 平和が損なわれる戦争を自分事として考える必要がある。

- (3) More is different (多は異なり: 理論物理学者アンダーソン, 1972 年)

核兵器の廃絶か抑止力か, 個人は廃絶を願っていても, 世論は抑止力を支持する。ロシアによるウクライナ侵略によって, 核抑止力が肯定的に捉えられている。しかし, 多くの人々がヒロシマの記憶と記録を継承することで, 核廃絶の世論を形成し, 世界に波及させることが望まれる。